

配慮のための言語形式選択にみられる男女差について

— 指示・命令遂行時を例に —

横倉真弥 (岐阜経済大学)

要旨

本稿は配慮のための言語形式選択にみられる男女差について、1文(発話)で使用する言語形式の組み合わせの観点から、指示・命令遂行時における言語使用傾向調査に基づき考察したものである。その結果、配慮のための言語形式の組み合わせは、R値(ある文化における個別行為の負荷度)が高くなると、女性は人間関係の種類に応じた多様な組み換えを行っているのに対し、男性は人間関係の種類を問わず、ほぼ一定の言語形式選択の組み合わせの変化によって配慮を表しているという男女差を明らかにした。

1. はじめに

配慮のための言語形式選択のあり方を研究するポライトネス研究は、言語の背景にある文化的・社会的規範に影響されることが大きいとされる。そして「配慮」を表すための言語形式選択では、どの言語においても女性の方がより「丁寧な」話し方をするとされている。宇佐美(2010)によれば、日本語における女言葉とは、「女性は丁寧であるべきである」というジェンダー・イデオロギーが言語使用の規則として明示的に具現化されたものであり、命令形や断定の助動詞「だ」の使用など「日本語の基本の形」を男性がそのまま使えるのに対し、女性はそれを丁寧にするための操作をしなければならないという。しかしながら、宇佐美もいうようにこれらの女言葉は必ずしも実際の場面で女性に使用されているとは限らないし、男性でも場面に応じて、配慮を表現するために上記のような操作をしているだろう。

配慮において「丁寧であること」は、Brown&Levinson(1978)の「ネガティブポライトネス(他者と一定以上の距離を保つ)」に相当する。したがって、日本語における女言葉は、日本語におけるネガティブポライトネスの志向体系とすることができよう。また同時に、配慮には他者との距離を近くする「ポジティブポライトネス」も存在し、1発話を構成する様々な言語形式のネガティブポライトネスとポジティブポライトネスの相互連関によって男女ともに対人距離を調整しているのが現実であろう。したがって、配慮のための言語使用における男女差を明らかにするためには、いわゆる「女言葉」「男言葉」の次元を超えて、こうした相互連関の相違の考察もまた不可欠となるだろう。

このような言語形式使用の総体としてのポライトネスを表す各言語形式の使用と組み合わせのあり方について、横倉(2016)は日本語母語話者130名を対象とし、上司と部下という人間関係1と、友人同士という人間関係2において、R値(ある文化における行為の負荷度)の異なる指示・命令の遂行場面を例に自由回答方式で得た調査結果の分析を行った。そして、そこで見られる言語形式の組み合わせについて、①どこまで文として完全に事態を言語で表しているのかという事態化程度、②ある発話内行為をどのような行為として表す

のかという行為の種類, ③ある発話内行為がどのような人間関係において行われるのかを表す関係性, ④ある発話内行為がどのような状況で起こっているのかを表す行為が起こる環境の4つの観点から考察し, 次のような一連の全体的特徴があることを明らかにした。

(1) R 値が上昇すると, 人間関係を問わず, 「指示・命令」という発話内行為は字義通りに表現されず, 「依頼」や「質問」の形式で表現される傾向にある。

(2) しかしながら, 「依頼」や「質問」のように表現された発話内行為「指示・命令」の実行性を保証するために, 言いさし・テ形止め・上昇イントネーションによる疑問など不完全な形式ではなく, 言いきり, 命令形など完全な言語形式を使用することで発話内効力の解釈を限定し, 直接的に表現する。

(3) R 値が高く, しかも「指示・命令」という聞き手にとって二重の意味で負担の重い発話内行為を, 当事者間の近い関係を強調することで遂行しようとする。

以上のような特徴が日本語母語話者全体の発話傾向からは見られたが, 本稿では, これらの言語形式選択の組み合わせにおける男女の相違について明らかにしていきたい。

2. 調査設計と分析枠組み提示

2.1 調査設計

周知のように Brown&Levinson (1978) は, 配慮のための言語形式選択に影響を与える要因として P 値 (力関係), D 値 (社会的距離), R 値 (ある文化における個別行為の負荷度) をあげている。P 値 (力関係) と D 値 (社会的距離) は日本語においては敬語使用に深く関わる要因であり, 日本語における配慮を表す言語形式選択に大きな影響を及ぼす。すなわち, P 値・D 値の言語形式使用のあり方は社会的制限を受けやすく, 男女差に関して観察しづらく, 傾向が見出しにくいことが想定される。そこで社会的制限を受けにくく, 比較的言語形式使用が自由であることが想定される P 値・D 値が低い人間関係, すなわち基本的に「です・ます」を使用しない人間関係を調査文脈として設定した。

設定された人間関係は, 「小さな会社で社員一丸となってプロジェクトに取り組んでいる (D 値が低い) 上司から部下 (P 値が低い)」という上下関係を基礎とした人間関係 1 と, 「友人同士 (P 値・D 値が低い)」という対等関係を基礎とした人間関係 2 の 2 種類である。この 2 種類の人間関係において, 配慮のための言語形式使用に影響を与える R 値の高低差のある指示・命令を遂行する場合に, どのような表現を用いるのかについて, 2013 年 6 月に東京・神奈川在住・在勤の 20 代から 60 代の各年代別の男女 13 名ずつ, 計 130 名を対象に自由回答調査を行った。

調査データ概要 (有効回答数と発話 (文) 数)

場面	回答者数		回答数		文の数	
	男	女	男	女	男	女
1R-	50	58	52 (2 回答 2 名)	59 (2 回答 1 名)	52 (全回答 1 文)	63 (2 文 4 名)
1R+	52	58	54 (2 回答 2 名)	60 (2 回答 2 名)	58 (2 文 4 名)	67 (2 文 5 名, 3 文 1 名)
2R-	50	54	51 (2 回答 1 名)	55 (2 回答 1 名)	51 (全回答 1 文)	55 (全回答 1 文)
2R+	52	55	53 (2 回答 1 名)	61 (2 回答 6 名)	57 (2 文 2 名, 3 文 1 名)	63 (2 文 2 名)

横倉 (2016) 表 3 と同じものである。

表 1 各設定と設問

発話内行為：指示・命令			
人間関係の種類	R 値	設問場面	設問
人間関係 1 (職場における上下関係：上司→部下)	低い (R-)	小さな会社で、社員一丸となって、あるプロジェクトに取り組んでいます。上司が部下 A に、A の机の上にある資料を、5 分後に始まる社内会議 (A も参加します) に持ってくるように言います。	<u>もし、あなたが上司だとしたら、どのように言いますか。選択肢に出てきた表現でなくてもかまいません。ご自由にお答えください。</u>
	高い (R+)	小さな会社で、社員一丸となって、あるプロジェクトに取り組んでいます。退社時間が間近ですが、上司が部下 A に、残業して明日までに資料を作成するように言います。	<u>もし、あなたがリーダーだとしたら、どのように言いますか。選択肢に出てきた表現でなくてもかまいません。ご自由にお答えください。</u>
人間関係 2 (友人関係：一時的にリーダーの役割を担った者→メンバー)	高い (R+)	友人同士で、地域のお祭りに模擬店を出すことになりました。友人の中から選ばれたリーダーが、A さん (A も一緒に模擬店を出す友人の一人です。) に、明日までに品物の受注を業者に確認するように言います。	<u>もし、あなたがリーダーだとしたら、どのように言いますか。選択肢に出てきた表現でなくてもかまいません。ご自由にお答えください。</u>
	低い (R-)	友人同士で、地域のお祭りに模擬店を出しました。祭りが終わり、みんなで後片付けをしています。友人の中から選ばれたリーダーが、A さんに (A も一緒に模擬店を出した友人の一人です)、ゴミ袋 (ゴミ袋は A の近くにありますが) を持ってくるように言います。	<u>もし、あなたがリーダーだとしたら、どのように言いますか。選択肢に出てきた表現でなくてもかまいません。ご自由にお答えください。</u>

横倉 (2016) 表 1 と同じものである。

調査文脈に指示・命令という発話内行為を設定した理由は、指示・命令は発話内行為に内在する負担が他の発話内行為と比べて最も重いものであるため、指示・命令の内容、すなわち個別行為の負荷度である R 値の高低が言語表現選択に与える影響を観察しやすく、P 値・D 値の干渉を最小限に抑えることができるからである。表 1 は調査文脈と設問をまとめたものである。

2.2 分析枠組み

上記の設問に対する自由回答で得られた各表現を分析・考察するため、文のある現象が事態化 (町田 2011) されたものととらえ、この文が表す事態の側面を次の 2 つにわけた。ひとつは、ある現象について言語を用いてどの程度まで事態化するのかという事態化程度であり、もうひとつは、現象がどのように事態化されるのかという事態化内容である。ひとつの文は複数の内容を同時に表すことができるため、通常、事態化内容は次の 3 つに分類できる。第 1 は発話 (文) が字義通りに表す行為の種類、第 2 は字義通りに表された行為がどのような人間関係において起こるのかという当事者の関係性、第 3 は文が字義通りに表す行為がどのような時空や前提で行われるのかという行為が起こる環境である。

また、このような事態の側面が配慮を表すために調整している内容を 9 つあげ、さらに、この調整を実現させる調整方法としての具体的な言語形式を 13 種類設定した (表 2 参照)。以下、調査結果に基づき、横倉 (2016) で明らかにした配慮のための言語形式選択の特徴において、具体的に男女がどのような調整方法を用いることで配慮を実現しているのかその相違について、考察を進めたい。

表2 分析枠組み

文が表す事態の側面		調整内容		調整方法(言語形式)
事態化程度		完全と不完全	発話内効力の解釈を聞き手に委ねるか	終助詞カ/音声/言いさし/言いきり/文末形式
事態内容	行為の種類	負担と利益	発話によって促される行為の行為者(負担者)とそれによる受益者	文末形式
		関係性	上と下	上位者と下位者
			上位者と下位者	授受形式
		内と外	内グループと外グループ	授受形式
	行為が起こる環境	親と疎	親疎の対人距離	敬語
			親しい人物と疎遠な人物	授受形式
		肯定と否定	する・しないの前提	否定形
		事実と可能性	行為実現性の程度	可能形
	現在と過去	行為が起こる時間的差	過去形	
	現実と架空	行為が起こる空間的差	仮定形/希望形/様態形	

横倉(2016)表2を改訂。

3. 行為の種類における男女差

まず、人間関係1,2の文脈において男女が「指示・命令」という発話内行為を遂行する上で、どのような「行為」として表現しているのかについてみてみよう。本調査で得られた回答を、文が字義通りに表す行為の種類にそって「指示・命令(～シロ・～シテクダサイ)」「依頼(～シテモラエル・～シテクレマセンカ・オネガイシマス等)」「許可要求(～シテモラッテモイイ?等)」「全般(～シテ)」「質問(～デキル?等)」「陳述」「その他」に分類し、その使用傾向を男女別にまとめたものが表3である。

表3 男女別行為の種類選択(%)

	指示・命令		依頼		許可要求		全般		質問		陳述		その他	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
1R-	36.5	30.2	25.0	28.6	1.9	0	17.3	23.8	3.8	4.8	15.4	12.7	0	0
1R+	13.8	7.5	60.3	47.8	0	1.5	3.4	1.5	8.6	25.4	10.3	16.4	3.4	0
2R-	21.6	16.4	52.9	54.5	2.0	5.5	19.6	18.2	0	0	2.0	5.5	2.0	0
2R+	21.1	9.5	64.9	57.1	0	6.3	1.8	7.9	3.5	14.3	7.0	4.8	1.8	0

2R- (男)「持ってきてちょ」は行為の種類選択では指示・命令に分類した。

表3から、人間関係1では、「～シロ・～シテクダサイ」という文末形式を使用した「指示・命令」、および「～シテ」という文末形式を使用した「全般」が、R値が上昇すると男女ともにその使用が減っていることがわかる。すなわち、「指示・命令」という発話内行為が日常的に起こりうる上司・部下の関係であってもR値が上昇すると、「指示・命令」という行為を字義どおりに表す表現を避けることで配慮を表しているといえよう。また、「全般」は発話内行為が、発話によって聞き手がある行為をすることを促すような種類のものであることを表すだけであり、そのなかでも「依頼」や「許可要求」のような特定の発話内行為を表さない。すなわち「全般」が減るということは、発話内行為の特定をする方向で男女ともに調整を行うということになる。

それでは、男女はそれぞれどのような行為を字義通りに表す表現を使用することで、「指示・命令」以外の行為を言語の上で特定するという調整を行っているのだろうか。

男性の場合はR値が上昇するのに伴って減少した「指示・命令」「全般」が、「～シテモ

¹ 文末表現の分類は、グループ・ジャマシイ編著(1998)『教師と学習者のための日本語文型典』くろしお出版、を参照した。

ラエル?」「～シテクレマセンカ?」などの授受形式と疑問形を併用した文末形式,および「オネガイシマス」のような遂行動詞で表す「依頼」へ収斂していることがわかる。これに対して女性は,男性と同じく「指示・命令」「全般」の減少分は「依頼」へと流れるが,男性ほど「依頼」の選択比率は高くなく,「この資料明日までに仕上げることできる?」のように,「～デキル?」などの疑問形で終わる「質問」もおおよそ25%の使用率がある。すなわち,行為の種類選択に現れる調整については,人間関係1においては女性の方が男性よりもR値の上昇に伴う配慮を表すための選択が多様であるといえる。

これに対して人間関係2では,R値が上昇しても「指示・命令」の使用率は,男性のほぼ変化なしに対して女性では7ポイント減となっている。対等な関係を基礎とする人間関係2においては,「指示・命令」を字義どおりに表す表現使用のあり方はR値の上昇に伴う配慮のための調整とはなっていない。ただし,男性の使用率は女性のおよそ2倍となっており,しかも「依頼」に次いで「指示・命令」が多いことも注目してよいだろう。このことは対等な関係を基礎とする人間関係において,男性の方が女性よりも「指示・命令」という発話内行為を字義どおりに表すことに対して抵抗が少ないということを示唆しており,対等な関係を基礎とする人間関係であっても,一時的に付与された役割(リーダーとその他のメンバー)に基づいた表現を優先的に選択する人たちが一定数いるということを表しているだろう。この点は,男性の場合,人間関係1のような本来「指示・命令」を行う役割を担う上司であっても,R値が高くなると役割に基づく表現を避けることで配慮を表すという傾向と反対の傾向を示しており,興味深い。

人間関係2では,もともとR値が低い場合でも「依頼」の比率が男性52%,女性54%と高く,この点は人間関係1と比較した時の特徴となっている。このため,R値が高くなっても男性では12ポイント,女性は3ポイント弱の増加にとどまっているのである。ただし,男性の場合は「依頼」により収斂するのに対して,女性は減少した「全般」が「質問」により多く流れていることがわかる。

分析枠組みで記した通り,行為の種類を選択は,文末形式を選択することで負担と利益の調整を行うが,上記のような行為の種類を選択傾向には,どのような負担と利益の調整があるのだろうか。Searl (1969), Leech (1983), ハリデー (2001), 蒲谷・川口・坂本 (1998) などの研究を受けて,横倉 (2012) は,発話内行為の負担と利益の帰属は「特別な権限や地位」を持つ者,「行為者」「決定者」「受益者」が誰であるのかという要素の組み合わせによって決定するとしている。これらの要素によって構成される発話内行為の種類をまとめたものが表4である。

表4 発話内行為における負担と利益の構造

発話内行為	特別な権限や地位	行為者	決定者	受益者
依頼/質問	特になし	聞き手	聞き手	話し手
指示・命令	話し手	聞き手	話し手	話し手/聞き手/どちらでもない
全般	特になし	聞き手	- - -	- - -
許可要求	聞き手	話し手	聞き手	話し手
陳述	特になし	- - -	- - -	話し手/聞き手/どちらでもない

横倉 (2016) 表6と同じものである。蒲谷・川口・坂本 (1998) を基に,横倉 (2012) が改定したものである。

表4にみられるように,「特別な権限や地位」が「話し手」にあり,発話によって促される行為を行う「行為者」が「聞き手」であり,発話によって促される行為をするかしないかを

決める「決定者」が「話し手」である「指示・命令」は、「聞き手」にとって最も負担の重い発話内行為となる。この負担を話し手の立場からみると、「特別な権限や地位」が話し手になれば、話し手は聞き手に負担をかけることに対して「借り」という精神的な負担が発生するが、「特別な権限や地位」が話し手にあるということは、話し手が聞き手に負担をかけることを「当然」とみなし、「借り」という精神的負担を発生させない要素となる。一方、発話によって促される行為が行われた場合に生じる利益を得る「受益者」が「話し手」である「依頼」は、受益することで話し手が、その行為の実行者である「聞き手」に対して「借り」という精神的負担を負うことを意味する。

こうした発話内行為における負担と利益の構造をふまえると、人間関係1においてR値が上昇すると「指示・命令」「全般」の使用が減り、「依頼」へ収斂するという男性の言語形式選択の傾向は、以下のことを意味する。

まず「負担」の観点からみると、「指示・命令」から「依頼」への移行は、「特別な権限や地位」を表示せず、発話によって促される行為を聞き手が決めることができる「決定者＝聞き手」にすることで、「聞き手」の負担を軽減するという調整がなされているといえる。逆に言えば、「受益者」を「話し手」とすることによって、話し手が聞き手に対して精神的な負担（借り）を負うという調整を行っていることになる。また、「全般」の構造は発話によって促される行為を行う「行為者」が「聞き手」であるということのみを表していることから、「全般」から「依頼」への移行は、「決定者」を「聞き手」とすることで負担を減らし、受益者が「話し手」であるとするので、話し手が精神的負担を負う調整を行ったことになる。

一方、人間関係1における女性の「負担と利益」の調整は、「指示・命令」「全般」の減少分が「依頼」へと流れる点については、上記男性の調整と同じになるが、「質問」が選択されるという傾向は以下のことを表している。「質問」と「依頼」の発話内行為の構造は表からは同じであることがわかるが、「依頼」を遂行することによって聞き手が行う行為は具体的なアクションとなるのに対し、「質問」を遂行することによって促され聞き手が行う行為はいわゆるアクションではなく、「聞かれたことに答える」、いわば「情報を与える」ということである²。すなわち、「依頼」が行為のやりとりをしているのに対し、「質問」は「情報」のやりとりをしていることになる。聞き手を実際に動かすという意味で、「行為」のやりとりの方が負担が重いといえることから、「質問」を選択するという事は、「依頼」と同じく聞き手にとっての負担が少なく、話し手が精神的な負担を負うという構造をとりながらも、「依頼」よりもさらに聞き手の負担を減らした表現を選んでいるということになる。

人間関係2においては、男性は「指示・命令」の一定した使用傾向、および「全般」の減少と「依頼」の増加傾向をみせる。「全般」が減少して「依頼」へ流れることから起こる負担と利益の調整は、先に述べた通りである。それではなぜ「指示・命令」の使用が減少せずに一定数あるのだろうか。

「指示・命令」の「受益者」は本来「話し手/聞き手/どちらでもない」という構造を持つ

² 「教えていただけませんか」という表現が言語の上でやりとりしているのは、「教える」という行為となり、字義どおりに表している行為は「依頼」となる。これに対して「質問」の場合は、「教えてほしいんだけど、できる？」のような形となり、「できる/できない」という情報のやりとりをしていることになる。教える内容そのものはもちろん「情報」となり、その内容は非常に重要な意味を持つ場合があるが、本稿ではそういった意味での負担の軽重を扱っているのではない。

が、実際に使用された回答をみると「明日までに業者に品物の受注を確認してください」など、「～シテクダサイ」という授受形式が使用されていることがほとんどである。「テクダサル」という授受形式は、「聞き手」が行動することによって発生する利益の受益者が「話し手」であることを明示する表現であるため、本調査場面における「指示・命令」の受益者は「話し手」に特定されていることになる。すなわち単に「～シロ」というのではなく「テクダサイ」という授受形式を使用することにより、負担と利益の構造を「依頼」よりに調整しているということになる。したがって人間関係2において、男性は「依頼」よりの負担と利益の調整を行う傾向にあり、R値が上昇すると、負担と利益の調整が「依頼」～「指示・命令」の間で行われるということになる。一方女性は、「指示・命令」はほとんど使用せず、「依頼」の使用率も変わらず、「全般」の減少分が「質問」へと流れるという傾向を見せる。これは女性の場合、人間関係2においてR値が上昇すると、負担と利益の調整が「依頼」～「質問」の間で行われ、「聞き手」の負担をより軽くする配慮を示しているといえよう。

4. 関係性の調整に現れる男女差

「指示・命令」という発話内行為の遂行は、聞き手に最も負担を強いる発話内行為であるため、負担を軽減するため、言語の上で他の行為の種類を選択することを見てきた。このような発話内行為の遂行にあたっては、その実行性を保証するため、近い人間関係を強調し、表示する傾向にあることを横倉（2016）では明らかにした。この近い人間関係を表示するためには「敬語」不使用と授受形式使用の2種類があるが、人間関係1,2において、どちらを使用する傾向にあるのかを男女別に見ていこう。

4.1 敬体選択に見られる男女差

表5 敬体と授受形式の男女別使用率 (%)

	敬体		授受形式	
	男	女	男	女
1R-	30.8	46.0	65.4	54.0
1R+	24.1	29.9	72.4	55.2
2R-	21.6	25.5	76.5	74.5
2R+	40.4	30.2	75.4	68.3

まず「敬体」については、人間関係1ではR値の上昇に伴って男女ともにその使用率は減る傾向にあるが、女性のほうが男性以上に減少している。敬体による調整内容は上下関係であり、敬体を使用することで話し手にとって、聞き手が対等から上位に位置する

こと、および対人距離が一定以上あることを示す。すなわち、人間関係1においてR値の上昇により敬体使用が下がる女性の傾向は、話し手にとって聞き手が対等から下位の間に位置し、対人距離が近いことを示すことで配慮を表す傾向があるということになる。一方、男性にとってはR値の影響は、敬体使用のあり方にあまり影響を与えず、24～30%程度であり、人間関係1における敬体使用による関係性の表示のあり方は、不使用という方向が一般的であるといえる。

ところが、人間関係2では逆に、R値の上昇に伴って、男性の敬体使用率は上昇するが、女性はあまり影響を受けないことがわかる。人間関係2において、R値の上昇が男性の敬体使用率の上昇をもたらしていることは、話し手にとって聞き手が対等から上位の間に位置し、対人距離が一定以上あることを示すことが配慮となっていることを表している。一方、女性にとってはR値の影響は敬体使用のあり方にはあまり影響を与えず、人間関係2における敬

体使用による関係性の表示のあり方は、敬体不使用の方向が一般的であるといえる。

4.2 授受形式選択に見られる男女差

授受形式の使用による調整内容は、上下関係、親疎関係、ウチソト関係に関わる。授受形式が表す上下関係は、モノや行為の与え手が上位につき、受け手が下位につくという授受の構造に基づく上下関係である。本調査場面において使用される授受形式は、「テモラウ系」「テクレル系」となるため、聞き手が上位者、話し手が下位者という関係性になる。人間関係1において、男性は敬体使用が30%ほどで一定しているのに対し、授受形式の使用は70%前後で一定している。このことから、人間関係1では、敬体使用で聞き手を対等より上位に位置付けることをしないかわりに、「持ってきてくれ」「持ってきてくれない？」のように授受形式を使用して、聞き手を上位に位置付けるという調整を行うことがほぼ確立しているといえるだろう。

一方、女性は人間関係1では、R値の上昇により、敬体を使用しないこと、すなわち聞き手を対等から下位の間に位置付ける（対人距離が近いことを表す）調整を行うことが、配慮のための言語形式選択のあり方となっているが、授受形式の使用により聞き手を上位に位置付けるかどうかの調整方法の選択は、R値を問わず約50%にとどまっている。

授受形式が表す親疎関係は、本調査場面に即していえば、「テモラウ」「テクレル」系の授受形式が使用されるため、モノや行為の与え手＝聞き手は、受け手＝話し手にとって、それ以外の人物よりも近い間柄であることを示している。横倉（2012）でも述べたように、授受形式は贈与交換システム（Mausse1954）の言語上の発現形であるが、周知のように贈与交換システムでは、モノや行為を贈与され、受け取ると、受け手は与え手に対して「恩恵」の念とともに「借り」が生じ、その「借り」を返そうとする。そして「借り」を返すと、今度はモノや行為の与え手と受け手が反対になり、このサイクルは人間関係が途切れるまで続くことになる。このようなモノや行為の「贈与」「受け取り」「返礼」のサイクルによって、人間関係を成立・維持・強化させる贈与交換システムが当事者間で続くかぎり、そのサイクルにいる人間は、ソトの人間と区別され、内集団関係にあることを表す。本調査場面では、話し手と聞き手の2者間でのやりとりを見ているため、授受形式が表す親疎関係とウチソト関係の調整はほぼ同じ意味となるが、授受形式の使用は話し手と聞き手が近い対人距離にあること、そして内集団関係にあることを表す。

上記をふまえると、人間関係1で男性は授受形式を使用することで、聞き手との関係が内集団関係であることを示しているといえる。ここで表示する内集団関係は、単なる仲間というよりも、話し手が聞き手に対して「借り」があるという精神的な負担を示すことに基づく贈与交換システムの循環内にあるというものである。それゆえ、話し手は聞き手に対して、言外に「借り」への返礼をにおわせているともいえる。一方、女性は人間関係1では、授受形式を使用して聞き手との関係を内集団関係であるということを表示するかどうかは、R値を問わず、およそ半数にとどまっている。すなわち、現在遂行されている発話内行為が「借り」に基づく返礼を期待させるようなものであることを、男性のように積極的に言語の上で表現しない。

これに対して人間関係2では、男性の授受形式使用による「借り」に基づく内集団関係表

示は,R 値によらず確立しているといえる。女性もまた,R 値によらず,授受形式使用による「借り」に基づく内集団関係であることを示しているといえる。

以上を整理すると,関係性の調整では次のような男女差があるといえよう。男性では R 値を問わず,もともと授受形式の使用が基本として確立しているうえで,R 値の上昇によって人間関係 1 では敬体不使用,逆に人間関係 2 では敬体使用による調整が加わる。これに対して,女性では,R 値の上昇による関係性の調整は人間関係 1 における敬体不使用の増加以外ほぼ見られず,授受形式の使用は半数で一定している。むしろ女性で強調すべきは,人間関係 2 における,R 値に関係なく高い授受形式の使用率である。女性の場合,人間関係 2 においては,授受形式の使用が「借り」に基づく内集団関係を表示することが基本状態(宇佐美 2002)として確立しているといえよう。このように関係性を調整する言語形式使用の傾向が確立しているということは,女性の場合,自己の属する内集団としては,男性と違って人間関係 1 の職場関係よりも人間関係 2 の友人関係の方により強く感じていることの反映として理解でき,R 値の高低よりも,もともと人間関係の種類こそが重視されていると思われる。

5. 事態化程度の選択における男女差

ここまで見てきたように,「指示・命令」という発話内行為を他の発話内行為を表す言語形式を用いて表現することによって,聞き手の負担を軽減する調整を行うとき,他方でその実行性が低くなるという危険も増加するだろう。それを回避するために,男女はそれぞれどのような言語形式を用いているのだろうか。

表 6 事態化程度の選択 男 (%)

調整内容	調整方法	1R-		1R+		2R-		2R+	
完全	言いきり	9.6	67.3	17.2	75.8	2.0	43.2	19.3	63.2
	疑問形	21.2		44.8		21.6		22.8	
	命令形	36.5		13.8		19.6		21.1	
不完全	言いさし	5.8	32.7	0	24.1	3.9	56.8	1.8	36.9
	疑問(音)	9.6		20.7		33.3		33.3	
	て形止	17.3		3.4		19.6		1.8	
合計		100.0		99.9		100.0		100.1	

2R- (男)「持ってきてちょ」は,事態化程度の選択では「言いさし(不完全)」に分類した。

表 7 女 事態化程度の選択 女 (%)

調整内容	調整方法	1R-		1R+		2R-		2R+	
完全	言いきり	9.5	58.6	17.9	80.6	1.8	32.6	6.3	49.1
	疑問形	17.5		55.2		14.4		33.3	
	命令形	28.6		7.5		16.4		9.5	
不完全	言いさし	11.1	41.4	4.5	19.4	3.6	67.3	3.2	50.8
	疑問(音)	7.9		13.4		45.5		39.7	
	て形止	25.4		1.5		18.2		7.9	
合計		100.0		100.0		99.9		99.9	

言語を用いてある現象をどの程度事態化するかという事態化程度は,発話内効力の解釈に関わるものであり,文(発話)の完全性を調整することによって行われる。そして,その調整は,完全な言語形式を使うのか,不完全な言語形式を使うのかによって実現される。本稿では,完全な言語形式として,平叙文の言いきり(「その資料,次の会議で使います。」等),終助詞「カ」を伴う疑問形(「その資料が次の会議で必要だが,用意が間に合うか。」等),命

令形(「その資料,次の会議に持ってきてください。」等)をあげ,不完全な言語形式として平叙文の言いさし(「持ってきてほしいのだが...」等),終助詞「カ」を伴わない音声による疑問(「持ってきてくれる?」等),「～シテ」で終わるいわゆる「て形止」(「持ってきて」等)をあげ,R値の高低によってこれらの言語形式の選択のあり方をみた。

表 6,7 から,R値が上昇すると男女共に完全な言語形式選択が増える傾向が見られ,発話内効力の解釈を聞き手に委ねない調整が行われる傾向にあることがわかる。すなわち,「指示・命令」という発話内行為を字義どおりに表現しないことによる実行性の低下を,完全な言語形式の使用によって補完しようという表れといえる。完全な言語形式の中でも「疑問形」の使用が最も多く,このことは聞き手へ返答(そしてその返答は話し手の意向に沿うことが語用論的条件から期待されている)の要求を明示することで,実効性を補完しようとしている表れだと考えられる。ただし女性の場合,人間関係 2 では,R値が上昇しても完全と不完全の言語形式の使用は約半数で拮抗している。

人間関係 1 において,「言いきり」と「疑問形」について,男女共にほぼ同じ値を見せているが,このうち R 値の上昇に伴い,男女共に「疑問形」の使用の増加が見られる点が注目される。そして「命令形」については,R値の上昇は人間関係 1 では男女ともにその使用を減少させる。ただし,女性の方が,男性よりも上記の傾向が顕著である。以上から,人間関係 1 における完全な言語形式選択に関しては,男女差はなく,もともと R 値に関係なく完全な言語形式使用がほぼ基本状態といえよう。

人間関係 2 では R 値の上昇は男性の「言いきり」選択には大きな影響を与えており(2.0%→19.3%),R値が高い場合の男性の「言いきり」使用率は,女性よりもおよそ 13 ポイント高いことが特徴的であるが,「疑問形」の使用は一定で影響を与えない。その結果,「言いきり」「疑問形」「命令形」がほぼ同じ率で使用されている。一方,R値の上昇は女性の「言いきり」の選択には若干の増加をみせるが,注目すべきは「疑問形」使用を大きく増加させている点である。人間関係 2 では,男女ともに「命令形」の使用に,R値の上昇はあまり大きな影響を与えていないが,人間関係 2 の R 値が高い場面での女性の「命令形」の使用率は男性よりもおよそ 11 ポイント低い。

以上の傾向から,人間関係 1 においては,R値の上昇と完全な言語形式選択の間では男女共に増加の傾向を見せるが,これに対して人間関係 2 においては,男性は「言いきり」が増加し,女性は「疑問形」が増加する傾向にあることがわかる。しかしながら,この場合の「言いきり」は「お願いします」「頼みます」という依頼の行為遂行文として実現されていることが多く,女性の「疑問形」も「持ってきてもらえますか」のような依頼を字義どおりに表す文型が使われていることが多い。すなわち,男女ともに「依頼」を字義どおりに表す文を使用しているが,女性は「疑問形」を使うことによって,依頼内容の決定権が聞き手にあることをより強調しているのだと考えられる。また,女性の場合,先に見てきた通り「指示・命令」という発話内行為を「質問」として表現する率も高いことから,「疑問形」の多用は「質問」との関係もあると考えられる。「依頼」も「質問」も「利益」と「負担」の構造は同じことから,いずれにせよ女性は「決定権」が聞き手にあることを強調する傾向があるといえる。

上記傾向を不完全な言語形式の使用傾向から見ると次のようになる。人間関係 1 の R 値が低い場合においてのみ,女性に「言いさし」の使用がほぼ 1 割みられた。これは「その資

料次の会議に持ってくるように」のような「～するように」という表現,および「その資料,次の会議に持ってきてほしいのですが」という希望表出の表現が回答としてあがった。しかしながら,それ以外の場面においては男女共,ほとんど使用されていない。

次に終助詞「カ」を伴わない,音声によって疑問を表す「疑問(音)」については,人間関係1のみ男性がR値の上昇に伴い,「この資料,明日までに仕上げといてくれる?」のような形で,その使用の増加傾向をみせるものの,その他の場面においては,男女共にR値の上昇はその使用にほぼ影響を与えていない。しかしながら,人間関係1では男性の方が女性よりも,若干高めであり,人間関係2では女性の方が男性よりも若干使用傾向が高めである。この原因として,男性は授受形式+疑問(音)で表す「依頼」の選択が増え,女性は「質問」の選択が増えたことが考えられよう。

「て形止」については,人間関係1,2を問わず,男女共にR値の上昇に伴い,その使用が減少する傾向にあるが,人間関係2において男性(19.6%→1.8%)の方が女性(18.2%→7.9%)よりも減り幅が大きい。この「て形止」を含めて,人間関係2では女性のほうが男性よりも不完全な言語形式の使用率が高いということであり(2R- 男:56.8% 女:67.2%, 2R+ 男:36.8% 女:50.7%),対等を基軸とする友人関係では,女性は男性よりも,発話内効力の解釈,すなわちその実行性の保証を聞き手にゆだねるという選択をする点に男女差が表れているといえよう。

6. 行為が起こる環境についての男女差

さらに,行為の実行性の保証とも関わって,行為が起こる環境についての男女差について見ることにしよう。行為が起こる環境をどのように表すのかは,ある行為について,「現在」/「過去」のものとして表すのか,「起こることを前提」/「起こらないことを前提」にして表すのか,「事実」/「可能性」として表すのか,「現実」/「架空」のこととして表すのか,を選択することによって表すことができる。例えば,現在起こっている現象について,過去形を使用して表すのであれば,それは間接的な表現となる。すなわち,これらの選択は,事態を直接的に表すのか,間接的に表すのかの選択になるといえるだろう。

この行為が行われる環境を表示する際の直接表現と間接表現の選択は,「指示・命令」という発話内行為を異なる発話内行為として表現することが配慮として求められる環境においては,その実行性を補完するためにどのようになされるのであろうか。表8は,それぞれの調整方法についての選択傾向を男女別にまとめたものである。なお,それぞれの数値は各々の選択の使用割合を示す。

表8 行為が起こる環境についての選択(%)

調整内容 調整方法	現在と過去		肯定と否定		事実と可能性		現実と架空					
	過去形		否定形		可能形		仮定形		希望形		様態形	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
1R-	0	0	17.6	9.5	7.7	11.1	3.8	3.2	11.5	7.9	1.9	9.5
1R+	0	0	34.5	29.9	19.0	32.8	0	1.5	10.3	20.9	0	3.0
2R-	0	0	21.6	9.1	13.7	7.3	0	0	2.0	5.5	0	0
2R+	0	0	21.1	19.0	14.0	30.2	2.0	0	3.5	9.5	0	3.2

表8からもわかるように,男女とも全体として直接表現が多く使われているといえよう。

したがって、以下の分析は間接表現の使用についての分析となる。

まず、行為が「現在」のものとして働きかけるのか、「過去」のものとして働きかけるのかという「過去形」の使用による調整は、人間関係、R値、男女を問わず、本文脈では行われないうことが明らかになった。英語では丁寧さを表すにあたり、現在の現象を「過去形」で表現することが行われるが、日本語の場合はそのような調整方法はなされないといえる。

次に、行為が起こることを前提として働きかけるか否かを調整する「否定形」の使用については、人間関係1では、男女ともにR値の上昇に伴い使用率が上昇する傾向にあることがわかる。しかしながら、R値が低い場面では、もともと男性の方が女性の2倍近く否定形を使用しているため、R値が上昇すると男性が女性よりも若干多くなるが、上昇幅からいえば、女性の方がR値と連動させてより否定形を選択する傾向にあるといえる。すなわち、女性はR値が低い場合は「～シテクレマスカ？」のように行為が起こることを前提として働きかけるが、R値が上昇すると「～シテクレマセンカ？」のように行為が起こらないことを前提として働きかけることが配慮を表す手段として使われている。男性の場合でも、間接表現のうち、「否定形」の使用率が最も高い。

人間関係2では男性の「否定形」使用率は、R値に関わらず2割程度あり、R値が低い場合の女性と比べると使用率はおよそ2倍あるが、R値が上昇すると女性と男性の使用率はほぼ同じとなることから、やはり女性の方がR値と連動させて否定形を選択する傾向にあるといえる。逆に言えば、男性はR値に関わらず、女性よりも行為が起こらないことを前提として働きかける傾向があるといえる。すなわち、「否定形」使用に関していえば、男性の方が女性よりも元来、間接的に表現することを選択する傾向にあるということであり、女性は元来、直接的に表現することを選択する傾向にあるため、「否定形」の使用がR値に伴う配慮を表す言語形式となりうるのである。

また、行為が起こることが事実なのか可能性なのかを調整する「可能形」の使用については、人間関係1では、男女共にR値の上昇に伴い、その使用率は上昇する傾向にあるが、女性の方が上昇の幅は大きく、間接表現のうち使用率が最も高くなる。人間関係2では、R値は男性の使用には影響を及ぼさないが、女性の可能形使用率はR値の上昇に連動する。そして女性のR値に伴う可能形使用率の上昇率は、人間関係1,2を問わずほぼ一定である。すなわち、女性の場合人間関係の種類を問わず、R値が上昇すると、可能形を使用することが配慮を表すための方法として選択されやすいといえる。可能形は主に、「～デキマスカ」のような形をとるため、この傾向は、R値の上昇に伴い「質問」という行為の種類を選択する率が上がる女性の傾向と関連があると考えられる。

さらに行為を現実あるいは架空の事として調整する言語形式のうち、比較的高い選択率を示しているのは「希望形」の人間関係1における女性の場合だけである。すなわち、R値の上昇によりその使用率も高くなり、男性の2倍の2割程度となっている。「希望形」の人間関係1の男性や、「仮定形」「様態形」の男女では高い場合でも1割程度である。

これらの言語形式使用は行為が起こる環境を間接的に表示することに結び付く。すなわち、上記傾向からは、表現の直接性、間接性の選択では女性の方がR値に連動して間接的な表現を選択する傾向があることが示唆できるのである。しかしながら、行為が起こる環境を調整するすべての間接的な言語形式の使用率は、多くても3割程度であり、「指示・命令」とい

う発話内行為を異なる発話内行為として表現することが、すでに間接表現であるため、行為が起こる環境については直接表現を使用することで、実行性を補完しているといえる。

7. 結論

以上の考察から、次のような男女の言語形式使用の差がみられることが明らかになった。

第1に、R値の上昇に伴い、「指示・命令」という発話内行為が「依頼」「質問」のように表現される傾向については、男性が「指示・命令」～「依頼」の行為を選択しているのに対し、女性は「依頼」～「質問」の行為を選択していることがわかる。男性が使用する「指示・命令」を字義どおりに表す表現は「～テクダサイ」のような授受形式を含むものであるため、「指示・命令」といっても「負担」と「利益」の構造は「依頼」寄りに調整されている。また、女性が多く使用する「質問」の「負担」と「利益」の構造は、「依頼」と同じであるが、やり取りする対象が「依頼」が行為であるのに対し、「質問」が情報であるという違いがあり、「質問」のほうが負担が軽い。このことから、男性が「行為」のやりとりとして聞き手に働きかける行為の種類の選択をするのに対して、女性は「行為」のやりとりから「情報」のやりとりへと内容を変質させ、聞き手の負担をより軽くするという調整も多く行っている。

第2に、「指示・命令」という聞き手にとって負担の重い発話内行為を遂行するにあたって、その実行性を保証するために、聞き手との近しい関係を表示することについては、次のような男女の特徴がみられた。職場の人間関係では、R値によらず男性は敬体不使用と授受形式使用で近しい距離を表すことが確立している。すなわち、上司と部下という仕事上の関係において「近しい」、「借り」に基づく「内集団関係」を強調することが確立している。一方、女性はR値が上昇すると、敬体不使用、すなわち一定の対人距離を表さない方向で関係性を調整しようとするが、授受形式による「借り」に基づく「内集団関係」は相手によって持ち込む場合とそうでない場合とに分けている。友人関係では、男性は、R値によらず授受形式による「借り」に基づく「内集団関係」表示が確立しており、その上でR値が上昇すると、男性は敬体を使用すること、すなわち一定の対人距離を表す方向で関係性を調整しようとする。一方、女性は敬体不使用と、授受形式の使用で「借り」に基づく内集団関係表示が確立しており、R値による関係性の調整はほぼ行わない。すなわち、対等関係に基づく友人関係では敬体不使用による「近しさ」、「借り」に基づく「内集団関係」を強調することが確立しているといえる。

第3に「指示・命令」という発話内行為を他の発話内行為として表現することによって、その実行性が低くなるという危険を回避する方法として、R値が上昇すると男女共に聞き手に発話内効力の解釈をゆだねない完全な言語形式選択が増えるという傾向が見られる。しかしながら、完全な言語形式の中でも男性は「言いきり」を選択する率が高く、女性は「疑問形」を使用する率が高い。この場合の「言いきり」や「疑問形」は「依頼」をどのように表すのかということと関連があり、発話によって促された行為を行うかどうかを決める「決定者」が「聞き手」にあることを明示する「疑問形」を使用するのが女性であるといえる。また、友人関係においては、女性の完全な言語形式使用率は50%程度であり、相手に応じて発話内効力の解釈をゆだねることを見極める傾向にある点は注目される。さらに、表現の直接性、間接性に帰結する行為が行われる環境についての言語形式選択については、男女

ともに直接表現を使用することで発話内行為の実行性を高めようとする傾向があるが、女性の方がR値に連動して間接表現を使用しているといえる。

以上に見られるように、R値が上昇するに伴って、男女とも人間関係の種類を問わず、聞き手の負担を軽減し、しかも同時にその実行性を保証する言語形式を選択していることが確認できよう。しかしながら、男性と比較して女性の方がより負担軽減の表現が多様であり、その発話内行為の実行性も聞き手にゆだねる傾向が強いといえる。しかも女性の場合、こうした選択が職場集団という人間関係と友人という人間関係とで使い分けられている点が特徴として指摘できる。それは特に、関係性の調整に見られる。すなわち、職場における人間関係では、近い関係を表す場合でも、授受形式を使った内集団関係よりも敬体不使用による距離を表さない方向で関係性を調整するのに対して、友人という人間関係では内集団関係を強調する点である。友人という人間関係では、話し手は内集団への帰属意識が強く働き、聞き手からの評価を重視しているため、そのような調整＝選択をしていると考えられる。したがってまた、聞き手に発話内行為の実行性の保証をゆだねるといっても、友人関係の方が職場の人間関係よりも強く表れてくることになるのである。男性では人間関係の種類を問わず、ほぼ同じような傾向で調整＝選択を行っているのに対して、女性の人間関係の種類に応じた使い分けは、女性が男性以上に人間関係を内集団か否かの視点から判断しており、それに応じた配慮の表れと理解できよう。R値が及ぼす言語形式選択における男女差は、こうした点に特徴的に表れているが、それはまた男女のおかれた文化的・社会的位置の相違をも反映していると考えられる。

【参考文献】

- Brown, P. & Levinson, S. (1987(1978)) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: New York: Cambridge University Press.
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵 (1998) 『敬語表現』 大修館書店
- Searle, John R. (1969) *Speech acts: an essay in the philosophy of language*, Cambridge University Press.
- (坂本百大・土屋俊訳 (1986) 『言語行為 - 言語哲学への試論-』 勁草書房)
- ハリデーM.A.K. (2001) 『機能文法概説 - ハリデー理論への誘い -』 山口登・寛男訳, くろしお出版.
- 町田健 (2011) 『言語構造基礎論 - 文の意味と構造 -』 勁草書房
- M. Mause (1954) *The Gift*. Glencoe: Free Press (有地亨・伊藤昌司・山口俊夫共訳, (1973) 『社会学と人類学 I』 弘文堂)
- Leech, Geoffrey (1983). *Principles of pragmatics*. Longman. (池上嘉彦・河上誓作訳 (1987) 『語用論』 紀伊国屋書店)
- 宇佐美まゆみ (2002) 「ポライトネス理論の展開 1-12」『言語』31 (1-13) 大修館書店
- 宇佐見まゆみ (2010) 「ポライトネスとジェンダー 隠されたヘゲモニー」中村桃子 (編) 『ジェンダーで学ぶ言語学』 世界思想社
- 横倉真弥 (2012) 「授受形式によるポライトネス上の距離の質的転換 - 贈与交換システムから見た人間関係の距離の維持と親近感表示の両立 -」『名古屋言語研究』 第6号, 81-94頁
- 横倉真弥 (2016) 「R値が及ぼす配慮を目的とした言語形式選択への影響について」『名古屋言語研究』 第10号, 71-84頁